

それからどした

第7期 OB 岸本 啓太郎

みなもすなる結婚といふものを私もしてみむとてするなり

——というわけで、私事で大変恐縮ではございますが、昨年の11月22日の良い夫婦の日に入籍いたしました。相手は大学時代からかれこれ7年半お付き合いしていた女性です。同期が次々と結婚していく中、私も彼女（現妻）と結婚することはどうの昔に決めてはおり、妻とも将来のことをあれこれ話し合ってはありましたものの、はてさて私はいつ結婚を切り出そうかと常日頃（ぼんやりと）考えておりました。

が、そんな（ぼんやりとした）日々はある日を境に変わりました。妻は大学卒業後に、今や小野ゼミ生御用達の慶應のロースクールで勉学に励み、一昨年司法試験に合格したのですが、私は妻が就職したら一緒に暮らして、それから結婚を考えようと（ぼんやりぼやぼや）考えておりました。そんなある日、本当に突然に妻にこう言われました。「私、修習が終わったら中国行くから」、と。ほうほうなるほど。

よくよく話を聞いてみると、どうやら妻の事務所は海外案件がメインのようで、入所したらまずは中国に語学留学に行くことが義務付けられているとのことでした。とはいえ、3ヶ月程度帰ってくるのだろうと高をくくっていたら、期間は半年から1年とのことでした。太っ腹な事務所というか、畜生、うらやましいぜというか何というか。そんな報告を受けたのが確か9月くらいでした。そして、会社の人（既婚女性の先輩）に相談した際に、「双方の家に挨拶とか両家顔合わせとか結納とか、いろいろ調整してたら2~3ヶ月はかかるよ！何してるの、マジで！」とお叱りを受け、そこでようやくぼんやりした気分から覚め、急



法隆寺ではしゃぐ著者の奥様

いで妻の実家に挨拶に行きました。もともとよく妻の実家にも遊びに行っており、妻の家族もそうなるだろうと思っていたためか、その場で結納とか入籍いつにする？という話になりました。そこで、たまたま両家の都合がぴったり合った11月22日に結納をし、その足で入籍に行き、新婚気分もへったくれもないまま妻は中国に行く準備を慌ただしく済ませ、年明け早々中国に行き、そして今に至ります。

何が言いたいかと言いますと、つまりはこういうことです。昨年の三田祭で同期の菊盛やその場にいた後輩に入籍した旨を伝えた後、案の定結婚枠でエッセイの執筆依頼が来たのですが、結婚しても何も変わらない自分は何を報告すれば良いのだろうかと途方に暮れ、何とかかんとか文をひねりだし、あとちょっとで終わる！とホッとしている次第でございます。おそらく来年ならばもう少しマシなご報告ができるかと存じますので、今回はこの辺でご勘弁ください。それではみなさまのご健康と小野ゼミのますますの発展を祈りつつ。